

特集 本シェルジュがオススメする
中小企業診断士のリベラルアーツの見つけ方

序章

リベラルアーツって何？



村上 知也

神奈川県中小企業診断協会

「先生は本当に何でもご存じですね。経営や会計に詳しいのは当然として、歴史とか哲学も詳しいのですね」

「いやいや、それほどでも」

「いやいや、本当に教養が高いというのは先生のような人をいうのですよ」

「いやいや（満更でもない）」

そんな会話が繰り広げられたことはないでしょうか。私は自分でいうのも何ですが、物知りなほうだと思います。そして、読者である多くの中小企業診断士の皆さんも物知りではないでしょうか。診断士資格は試験範囲そのものが幅広く多岐にわたります。これだけ幅の広い資格試験はほかにはないでしょう。公務員試験も幅は広いですが、奥行きでは診断士試験のほうが深いと思います。そして、診断士資格を取得された方は知的好奇心が高いと思います。ですから、冒頭のようなやり取りが起きることもあるのでしょう。

ところで、教養とは何でしょうか。物知りな人のことを教養があるというのでしょうか。

私の大学生時代は、2年生までは教養課程と呼ばれており、3年生からが専門課程でした。私は生物工学系の学部にて在籍していましたが、確かに教養課程では、さまざまな科目を学んだ思い出があります。経済学や心理学、哲学もありましたし、ドイツ語もありました。もちろん、物理学や数学もありましたし、私の専攻につながる生物工学の授業もありまし

た。今思うと、大学の専門課程が一番ブラックな働き方（学び方）をしていました。朝から夜中まで、よく実験に明け暮れていたものだと思います。辛く楽しかった専門課程での研究室生活として、鮮明に記憶に残っています。

その一方で、専攻分野以外の学問の記憶はあまり残っていません。経済学は診断士試験で学び直したわけですが、ほとんど初見と感じながら勉強していました。果たして大学生時代の教養課程で学んだことは教養だったのでしょうか。

1. 教養とはリベラルアーツの日本語訳

リベラルアーツとは、ギリシャ・ローマ時代からの概念で、算術、幾何学、天文学、音楽、文法学、修辞学、論理学の7つの分野からなります。人を奴隷ではなく自由人にする7つの学問というのが本来の意味合いです。では、現代に必要な科目は何になるのでしょうか。

2. 「教養」の定義

教養とは何か知るために、「教養とは」といった、タイトルがそのままの本を読むのは少し恰好悪い気がします。教養が身につけていない自分が、教養を身につけているようなふりをするために、「答え」を探してノウハウ本を読んでいるような気持ちになりました。

それでも、各章で述べる教養科目の前に、教養そのものを定義している本の中から2冊を取りあげたいと思います。

人生を面白くする本物の教養



出口 治明 著
幻冬舎新書
2015年

教養とは、人生においてワクワクすること、面白いことや、楽しいことを増やすためのツールである。

本書を最初に読んだとき、「知識は手段で、教養が目的」といわれると少し違和感がありました。しかし読み進めると、物知りで知識を持っている人が教養は高いのか？ という命題への1つの答えが示されているのではと感じました。

教養とは面白く生きるためのもので、教養を身につける手段の1つが知識なのです。教養を身につけるにはある程度の知識は必要でしょう。さらに、知識を知っていることと頭で考えて使うこととは別物であり、自分の頭で考えられる力が教養なのだと考えられます。

多くの情報があふれる中、インターネットによって調べ物は誰にでもすぐできるようになりました。結果、多くの人がコンビニに行くかのように答えの情報に群がってしまい、わかったつもりになっています。自分が知らないという状態を恐れるため、すぐに答えを求めてしまうわけです。この点について、出口氏は「ソクラテスの無知の知」が失われつつある、と指摘しています。自分が知らないことを知るとするのは難しいものです。

僕は君たちに武器を配りたい



瀧本 哲史 著
講談社
2011年

一般的にビジネスでの「武器」は「英語、IT、会計」

といわれるが、これらは「奴隷になるための武器」であり、不安解消マーケティングの産物でしかない。それよりも重要なのは自由になるための「リベラルアーツ（教養）」である。本書は、教養を武器に、コモディティにならない働き方を追求していかなければならないと説く。

本書では「武器」という物騒なキーワードになっていますが、これからの先の見えない時代を生き抜いていくために必要なものは何かを考えさせられます。AI時代に向かうにつれ、さまざまなことを知っているだけでは戦っていけないでしょう。必要なのは、生き抜くための武器。それが教養であると瀧本氏は指摘しています。コモディティにならないためにどのような力をつけるべきなのかを自分の頭で考えることが必要といえます。

とはいえ、ある程度知識がないと考えられないのも事実。前書の出口氏は大学生時代が学生運動の最盛期だったため大学に行かず、1日14～15時間は本を読みふけるという幸せな時間を送っていたとのこと。私もそれなりに本を読んできましたが、診断士試験の受験中は受験関係の本しか読んでいないことに気づきました。そこで中小企業診断士と関係なく本を読みふけろうと200冊の本を読んだ年に、診断士試験に合格できました。もちろん、本を読んだことと合格に因果関係があるかはわかりませんが、2次試験に4年間落ち続けた私の蒙を啓いてくれて合格につながり、教養が少しはついたのだと信じています。

今回の特集では、教養を高める書籍を紹介しながら、教養とは何かを考えていきたいと思っています。

村上 知也

(むらかみ ともや)

2008年中小企業診断士登録。(株)にぎわい研究所代表取締役。中小企業の生産性を高めるために、IT活用を中心に支援を行っている。

